

C-29 当センターにおける腹臥位療法時のスキントラブル発生要因について

和歌山県立医科大学附属病院 救命救急センターICU

志田光恵、武野明香、近藤佳代、泉仁美、川崎貞男、篠崎正博

【目的】当センターでは挿管人工呼吸管理中の下側肺障害患者に対し長時間の腹臥位療法を行っている。腹臥位療法の合併症として気管内チューブの自己抜去やルートトラブル、顔面の浮腫がある。当センターでは腹臥位療法に伴う自己抜去やルートトラブルの報告はないが、顔面の浮腫、皮膚剥離などのスキントラブルが発生している。そこで今回腹臥位症例 43 例について、スキントラブルの発生要因を調査し検討した。

【対象】1999 年 9 月から 2002 年 2 月の間に腹臥位管理を行った 43 症例（男性 34 名女性 9 名）。

【結果】スキントラブルを起こしたのは 43 症例中 10 症例（23.3%）で平均年齢はスキントラブル発生群が 60.7 歳、非発生群が 65.2 歳であった。ICU 在室日数平均はスキントラブル発生群が 18.3 日、非発生群が 15.6 日で、有意差は認めなかった。死亡症例はスキントラブル発生群が 4 名で約 40%、非発生群が 4 名で約 12.1%であった。平均腹臥位時間ではスキントラブル発生群が 76.9 時間、非発生群が 35.8 時間であり、有意差が認められた。スキントラブル発生群の腹臥位前後の P/F ratio は 133.35、197.39 であった。非発生群の方は腹臥位前

が 145.9 後は 266.6 であった。腹臥位前の P/F ratio は両群ともにほぼ同じであったが、腹臥位後でスキントラブル発生群の方が低値を示した。TP、ALB 値では両群ともに差は認めなかった。スキントラブルの内容は顔面の浮腫が全症例で認めた。発生時期は腹臥位療法を開始してから 24 時間以内であった。また開眼できない程の強度の眼瞼浮腫は 6 例で認め、頬骨部の皮膚剥離は 2 例、耳介の皮膚剥離は 1 例であった。

【考察】腹臥位管理中は常に顔面が横を向いた状態になるため、通常管理に比べ静脈還流が悪くなり顔面の浮腫が発生すると考えられる。スキントラブルは肺酸素化能が悪い症例に多く発生していたという。

【結語】肺酸素化能が悪い症例にはスキントラブル予防の十分な対策が必要である。